

## 謝 辞

小野正志

本日は、師走のご多忙の中、寒い中にもかかわらずご遠方から、かくも多数の方々にご参集賜りまして誠に有り難うございます。

お陰様で故小野衛の葬儀は滞りなく終えさせていただけますことを感謝申し上げます。

父の一生は一言で言えば、まさに波乱万上という言葉がぴったりではないかと思えます。

これほどまでに様々な体験をし、あらゆる苦難の境遇にあった人は少ないのではないのでしょうか。

旧制中学生の時に父親に死別してから、暖かい家庭には縁が薄かったと思えます。妹二人にも若くして死別し、最初の妻宮城芳子には結婚後半年で死別しております。

養父宮城道雄の急逝によって起こる様々なトラブル。さらに同時期に日本音楽著作権協会の内紛に絡んで無実の罪に陥られます。そして、それらの過程で味わう、人の態度の変化。

しかし、父はあらゆる苦難に耐えて一つ一つ乗り越えて参りました。それを支えたのは人としての生き方、特に音楽家としての生き方に対する揺るぎなき信念でありました。

音楽家は、音楽のみをよりどころとして生き、それを基に発言し行動すべきものであるとし、それ以外の姿勢を極端なまでに廃しました。また、音楽家は精神の自由を失ってはならないことを常に口にして、自らも戒めておりました。

ただ、かたくななまでに妥協のないその姿勢が、時として人に不快感を与えることもしばしばであったのではないかと私は想像しております。

東京大学の物理科卒業と言うその経歴から理性の人であると見られがちですが、人間小野衛は実は感性の人ではなかったかと思えます。内に秘めた繊細な感情はその作品に良く現れております。

しかし、本人は理科系にありがちな無骨で自己表現が下手なタイプで、その事も人と摩擦を起こすことにつながったのではないかと思えます。

日本音楽著作権協会事件で無実の罪に問われた、拘留と裁判が最後の苦難でありましたが、その罪も晴れて、更に宮城家から離れて創明音楽会を創立してからの父には穏やかな日々が続きました。

以後、死を迎えるまでの三十五年間は、心豊かにのびのびと自分の音楽に専念できたのではないのでしょうか。

父の強烈な精神力を支えたのは、強靱なる肉体でもありました。一昨年と昨年の二度もの大腸の大手術に耐えて、すこぶる意気盛んでありました。主治医も父の肉体の強さには舌を巻いていました。

しかし、今年四月、総胆管の石除去の手術後は、極端に体力が落ち、それとともに、最も重要な気力を失ってしまったようでした。私共は、今までが異常に丈夫であったのでこれで年相応の様子になったのだよと慰めましたが、もう聴く意欲はありませんでした。

実はこの頃には大腸癌が肺に転移して拡大しており、医師も手がつけられない状態になっておりました。本人もその事は分かっていたようで、主治医と母には、無用の延命はしないようにと言う意志を告げていたのです。

そんなある日、「わしはもう創るという仕事が出来なくなった」と寂しそうにつぶやいたのが私には忘れられない言葉となりました。

この時が、音楽家としての小野衛にとって事実上の死であったのではないかと思うからです。本人は明ら

かにその事を悟っていたと思います。

これ以後は、明らかに延命することに積極的ではなくなっていました。精神の活動のない抜け殻で生きることには耐えられなかったのではないかと思います。

私に対して、「わしはもう何も言わぬからおまえが創明音楽会をしっかりとやれ」と言ったのもこの時期でありました。四年前に名誉会長となってからも、わしが引き続き会を運営する、と言って一線に立ち続けた父の口からは出るとは思われない言葉でした。私は密かに涙したものです。

最後の日も自分の意志を貫きとおしたのでした。

どうしても家に帰ると医師に無理を言って自宅に帰ったのが、十一月十四日午後二時三十分頃でした。すでに危険な状態にありましたが、同行した主治医のおかげで無事自宅のベッドに横になったのです。

父は「ああ、楽になった」と言い、しばらくは母や家族と話をしておりましたが、次第に話をしなくなり静かに眠り、約三時間後には次第に心肺停止の状態になってしまいました。直ぐに救急車で病院に戻りましたが、もう回復することはありませんでした。結果的には本人の希望通り自宅で死を迎えることが出来たのではないのでしょうか

小野衛の肉体は亡くなってしまいましたが、その作品は変わらぬ生命を持ち続けることと思います。のみならず、ますます輝きを増すのではないかと確信を持って思います。

最後になりましたが、生前に関係各位より賜りましたご支援ご高誼ご厚情に感謝申し上げ、心から御礼を申し上げます。

創明音楽会と日本竹道学館会員の皆さんにも、全国各地からご参集いただいたことに感謝し御礼を申し上げます。皆さんに囲まれて父は幸せな三十五年間でした。本当に有り難うございました。

平成十三年十二月十一日